

# 石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 27 年 3 月 31 日発行 第 37 号

## おながわ復興まちびらき

東日本大震災から 4 度めの 3 月が訪れました。天皇・皇后両陛下が石巻を訪れ、石巻市内のあちこちに交通規制が行われました。石巻に住む人たちは、皆、しみりと 11 日前後を過ごしたと思います。石巻市と女川町で被災した私の家もそうでした。

3 月 21 日（土）、石巻の東隣の女川町で、「おながわ復興まちびらき 2015 春」が開催されました。竹下亘復興大臣、衆議院・参議院議員、近隣自治体首長、議員、県知事、県議会議員、商工会関係者がそろろうという、女川町の再出発への後押しを感じる豪華な顔ぶれでした。

この日司会役を務めたのは、女川町出身で、今は東京で大学生をしている女性でした。また、テープカットやくす玉割り、ブラスバンド、鼓笛隊等には、女川町の小中学生も参加しました。このような若い人たちが、新しいまちの希望であることは疑いありません。

会場となった新設の JR 女川駅は、温泉施設「ゆぼっぼ」と併設されています。ウミネコが羽を広げたイメージの曲線の屋根を持つ印象的な建物です。世界的な建築家の坂茂氏のデザインです。この日、坂さん自身もこの式典に出席し、女川町長からの感謝状を受け取りました。

木村公雄女川町議会議員長のごあいさつには「終着駅は始発駅」というフレーズが出てきました。これは、北島三郎の曲名ですが、ちょうど女川駅が石巻線の終着駅兼始発駅のため、議長のお気に入りのようで、ときどきあいさつに登場します。

この日のイベントは JR 石巻線の一番列車の運行と合わせて行われました。JR 東日本の副社長が式典に出席していましたが、多くの鉄道ファンとマスコミが列車に向けてカメラを構えていました。村井嘉浩宮城県知事か



ら JR へ、仙台—女川間の直通列車早期開業への要望が出ると、会場がとても賑わったことは事実です。女川町民の期待がここにあることは間違いないでしょう。

須田善明女川町長のあいさつは、まず、駅の高さと地権者への感謝でした。この駅自体がもともとの住宅地よりも 7~9 メートルかさ上げした上に立っています。たしかに、駅の周りを見回しても、以前の町の風景を思い浮かべることが困難です。以前の駅よりも屋久 200m 内陸に移動しましたので、元の女川第 2 保育所建物のそばのはずなのですが、目に見える手がかりはありません。そう思うと寂しい気持ちも湧いてきます。

一方、あいさつの後半は、町長の関心の変化を感じさせるものでした。町長は終わりに、女川町で生まれた新商品としてホヤせんべいを紹介したのです。それを聞いて、会場は沸きました。

この宣伝効果は絶大で、しばらく後にテントの売店でホヤせんべいを買おうとしましたが、売り切れでした。そんなことなら、あらかじめたくさん用意しているように町長から売店に指示があればと思いますが、町長も忙しく、事前の打ち合わせというわけにはいかないのでしょう。ともかく、これまでの防災・津波一辺倒から商売・経済を語る段階が来たように思いました。

経済のことといえば、まずはこの温泉施設「ゆぼっぼ」がうまくお客さんを集めることが大切です。

この日、町長自ら先頭に立って「ゆぼっぼ」の内覧会が開催されました。私も参加しましたが、木の暖かさを感じる内装です。消火栓のふたやエレベーターの扉も、壁面の木目と調和する色彩が選ばれているようです。後で町長から聞いた話ですが、坂さんの事務所から町へ、自動販売機の外見にまで注文があったそうです。

内部には高名な日本画家の千住博さんが描いた樹木の絵の壁画のタイルのアートがあります。この壁画を見るために「ゆぼっぼ」に足を運ぶ人もいるでしょう。こういう効果を想像すると、建築家・アーティストの皆さんの女川町支援の大きさがよくわかります。

駅と隣接した温泉施設「ゆぼっぼ」は、東日本大震災前からありましたが、温泉と駅との間の出入口は別でした。今の施設は、以前よりも JR 女川駅との一体感が強まり、冬でも温泉の建物から直接改札を通してバリアフリーでホームに出られます。復興のために、多くの方の利用を期待しています。

(丸岡泰)

## 登米市観光の可能性

昨年12月14日、みやぎ大崎観光公社の企画・案内で、東洋学園大学泰松範行准教授と学生、香川敏幸慶應義塾大学名誉教授とともにモニターツアー「東北のセンターライン・未来プロジェクト」に参加しました。前号で南三陸町の林業体験について学生が報告しましたが、今回は私が登米市についてお伝えします。

市の名前の「登米」の読みは「とめ」ですが、その中の町名の同じ漢字「登米」は「とよま」です。地元以外の方には難しい地名です。

ここは、東日本大震災の直接の被害はなく、昔の風景が残っています。同市の観光キャッチフレーズは「みやぎの明治村」です。今も残る古い建築物から昔、政治と経済の要所だったこの地の繁栄ぶりをうかがえます。

ここは初め、一時的に県庁所在地となったところだそう、県の役所の建物が水沢県庁記念館（旧水沢県庁庁舎）として今でも残っています。同様に、教育資料館、警察資料館など古い建物がそのまま残されています。さらに、かつては北上川の舟運の拠点として栄えたまちのため、蔵を備えた商店もあちらこちらに見えます。確かに、明治の初めの光景がそのまま残っているようです。

かつての旧登米（とよま）高等尋常小学校校舎だった教育資料館には、教育勅語が飾られており、時代を感じさせます。この小学校は町民から集めた資金により建築されたということです。舟運で栄えた豊かなまちの歴史を感じさせるエピソードです。

この日案内をしてくださった方はこの学校で校長をお勤めになったボランティアの元先生とのことで、とてもぜひたくをさせていただいたと感じます。

ここでは女性の教育にも力を入られたようで、縫製に使われたミシンが今でも飾られています。教室のオルガンと並べられた机など、昔の授業風景がよみがえるようです。事前に予約すると給食体験もできるそうです。

平成22年にここで撮影された映画「エクレール お菓子放浪記」で陽子先生がアキオ少年にピアノで「お菓子と娘」を弾いているシーンを思い出しました。この映画の撮影支援のため、登米市の観光協会のみなさんと話し合ったことを思い出しました。ご案内の登米市観光協会の方にも関係者がおられ、旧交を温めました。

私たちは警察資料館などを車窓から見たほか、日本画家の高倉勝子美術館「桜小路」を見て、登米町の見学を終え、バスで伊豆沼へ向かいました。

伊豆沼は白鳥の飛来地として昔から知られた観光地です。シーズンになると駐車場に車があふれるほど人が集まったそうです。昭和60年、ラムサール条約に登録されましたが、昔ほどの集客はありません。理由は、環境保全が優先され白鳥を集めるための餌付けが行われなくなったことと、観光・レジャーの多様化のようです。

この沼のそばにある（有）伊豆沼農産を訪れ、伊藤秀雄社長の話を聞きました。昭和63年創業の同社は農業・養豚業を基本に、事業を多角化しています。社のコンセプトは「農業を食業に変える」です。伊豆沼ハム・ソーセージを「伊達の純粋赤豚」というブランドで生産・販売しながら、「くんぺる」というレストラン、道の駅のような直売所を同時経営しています。稲作とブルーベリー、野菜の栽培、加工、販売も行っています。

また、食を通じた教育活動にも熱心で、農作業やハムづくり体験を教育メニューとして提供しています。東北大学の先生や学生との接点もあり、伊豆沼から取り出した菌をハムの熟成にも使用したり、学生の意見を経営に取り入れたり、新しい試みをしています。

私ははじめ、ここがモニターツアーの訪問先となった理由が不明でしたが、伊藤社長からうかがって、農商工連携の成功例であり、観光業者からも注目される理由がわかりました。YOUTUBE上にある経済産業省製作の紹介ビデオで農商工連携の成功例とされています。また、同社は平成21年にJA全中・JA都道府県中央会・NHK主催の日本農業賞大賞を受賞しています。

自社製品のお客さんについて、伊藤社長は、陳列棚の一番上の高級価格帯の商品を選ぶ方向け、と言っておられました。手堅い商品の生産とともに、しっかりした営業感覚ももっていらつしゃると感じました。ハムは三越、香港そごうなどの高級店の富裕層向け商品としてブランド化に成功し、肉の本場ドイツでも受賞歴があります。

「くんぺる」での食事後の意見交換の際、来訪者の私たちに、観光PRの方法について相談されました。首都圏などでのPRの際、雑煮に似た登米の名産品「はっと汁」を試食で提供するほうがよいか、という質問でした。PRで名産品を提供すると、登米を訪れた時に感じる新鮮さが薄れるのでは、という心配のようでした。

私は、観光PRのためには食べてもらうべきだが、食べ物だけで旅行には結び付きにくく、食以外の観光資源との連携が必要で、教育機関向けの専門的営業を強化すべき、と言いました。ご参考になれば、幸いです。

同社は地域との連携も活発です。赤豚を育てる養豚業者、直売所に納品する農家との仕事があるほか、地元新田の文化振興にも熱心です。同社は地域の良さを伝える「新田あるものさがしの会」の事務局を務め、新田居住の方を次々に講師に招き、情報共有に一役買っています。

登米のみなさんは、私たち一行を本当に歓迎してください、観光への強い期待を感じました。観光のために都会の大学生の率直な意見を聞ける機会は貴重なのだと思います。案内の他、昼食に、お土産までいただきました。この場をお借りし御礼申し上げます。

伊豆沼の後、モニターツアースポンサーのNEXCOの高速道路パーキングエリア（PA）2か所へ向かいました。犬の散歩をさせるスペースの「ドッグラン」が必要かどうか、どのPAも個性の乏しい作りになっていないか、来訪者の目を見て、アンケート記入をしました。地元にとっての発見があることを祈るばかりです。

視察中、東京の大学生がそばの「化女沼（けじょぬま）って地名が不思議」と話していました。登米（とめ・とよま）と同様、接客の際、訪問者が疑問に持つことを調べて解説することも必要だと再認識しました。

このような細かい地名のエピソードを収集しておくことは直接観光業関係者の収入にはなりません。が、このような情報を提供することで、「よいガイドさん」「楽しいツアー」という印象につながります。由緒を記した立札・冊子があれば、印象は変わります。登米は歴史のあるまちですので、埋もれた逸話は多数あるのだと想像しています。これから大学で学生とともに掘り起こすにふさわしい課題を与えられた心境です。

（丸岡泰）